

## 第VII章 ま と め

### 1 出土遺物について

#### A 石器について

本遺跡から出土した石器（剥片類を含む）・石製品は518点に及ぶ。ここでは阿賀北地域を中心に、石器組成について若干の比較を行う。

弥生時代の石器は全国的な集成が進み【国立歴史博物館1997など】、後期には石鎌が残存するものの、剥片石器が減少することから鉄器化が進んだとの解釈が提示されている【松木1995・禰宜田1998など】。本県では、石川日出志氏【石川1997b】・立木宏明氏【立木2001b】などが弥生時代の石器の様相を示している。このうち石川氏は、弥生V～VI期の北陸系土器を出土する遺跡で石器が見られないとし、「鉄器化が完了したものと判断できる」とした【石川1997】。一方、同文において石川氏は、弥生V期で天王山系統の土器が出土する新潟市六地山遺跡では石鎌・石錐などが伴うことから、鉄器化の普及度が北陸系土器分布圏と異なることを指摘しているようにみえる。土器の系統毎で石器組成についても、違いがある可能性もある。東北系土器が主体の本遺跡との比較のため、県内の弥生時代中・後期の遺跡で石器組成の判断が付きやすい遺跡を第21図、第22・23表に示した。第23表の後期の時期区分は、滝沢2005（P.61第24表参照）による。石川氏が指摘するように「石器の認定や報告の方法が一定でない」こと等が大きな問題となる<sup>1)</sup>。ここでは立木宏明氏の方法【立木2001b】を基本に、原報告を元に種別を表示し、時期や土器系統別に比較を行う。これに加え、高地性集落と低地集落の石器組成を比較して、武装の強化具合・生業的側面【禰宜田2002ほか】を概観する。

##### a) 阿賀川流域及び阿賀北の様相

山元遺跡では石製品を含めて518点出土しているが、剥片類を除く種別では不定形石器が最も多く、石鎌がこれに次ぐ。礫石器では磨石類が最も多い。これは、古津八幡山遺跡【渡邊・立木ほか2001・2004】とほぼ共通した様相である。剥片石器で石鎌が卓越する点は各遺跡で共通しているが、中期で低湿地に位置する道端V遺跡【前川・沢田ほか2006】や、中期主体で砂丘上に位置する長松遺跡【田辺1991】、中～後期で低湿地に位置する中曾根遺跡【青木・鈴木ほか2005】で磨石類が少ない点は重要と考える。不定形石器・磨石類の多さは、集落の存続期間や立地・定住の度合い等にかかわる可能性がある。

##### b) 北陸系中期主体の遺跡との比較

柏崎平野では下谷地遺跡【高橋ほか1979】・小丸山遺跡【品田ほか1985】・箕輪遺跡I【小野塚ほか2002】がある。このうち下谷地遺跡・箕輪I遺跡は管玉生産が行われており、両極石器・砥石などが高い比率を示している。これら玉作り関連資料を除くと、石鎌・磨石の多さが目を引く。

<sup>1)</sup> 第22・23表に掲載した遺跡は、弥生時代の遺跡であること、縄文土器が出土していても弥生時代の土器に比して極端に少ないとから、仮に縄文時代の石器が混入していても石器組成に大きな変更を要しない可能性が高いと判断したものである。比較資料は山元遺跡と同様に、弥生時代後期を主体とする遺跡に加え、時期的な変遷を検討するために、道端V遺跡【前川・沢田ほか2006】など中期例も示した。ただし、遺跡毎で調査の状況は異なっており、例えば滝ノ前遺跡は工事中に見つかった緊急の発掘調査【関1972】、砂山遺跡は発掘当時の記録が残っていない。また、六地山遺跡や吹上遺跡は報告分のみをカウントしており、実際の出土数は明確でない等の制約もある。

### c) 後期の北陸系土器主体の遺跡との比較

頸城の裏山遺跡 [小池ほか2000]、下馬場遺跡

[尾崎2006] がある。剥片石器が非常に少ない。

山元遺跡・古津八幡山遺跡との差異は明瞭で、特に石鏃の出土量は大きく異なる。一方で、下馬場遺跡では磨石類の多さが際立つ。中期の北陸系土器分布圏との差異も明瞭で、後期に入り剥片石器の激減が伺える。

### d) 機能別に見た石器組成

試みに国立歴史博物館1997・櫛宜田2002の区分による機能別内訳で概観する。ただし、機能別に見た場合、不定形石器の扱いが問題になる。国立



第21図 弥生時代中後期の石器組成検討遺跡

第22表 遺跡別石器・石製品出土数

No	遺跡名	剥片石器						礫石器						石製品												備考				
		石鏃		石錐	両極石器	不定形石器	石核	その他	磨製石斧	磨石類	砥石	軽石製研磨具	擦切砥石	石皿	台石	玉錐	石錐	石錐	管玉	管玉未成品・工程品	勾玉未成品	有孔円板	紡錘車	バステル	環状石斧	環石	擦切石製品	軽石製石製品		
		尖頭器	成品																											
1 山元		29	5	3	172	1	1			15	5					1	5	2						1						
2 滝ノ前		10	4	1	1	8	30	1																						
3 砂山		42	19	10	1	62	26			2	1					1		1						1						
4 長松		29	4	2	1	24	5			3														1	1					
5 中曾根		5	2	2	1	—	—	1																						
6 道端V		30	3	1	2	3	2	1		9	7								3	1					1	1				
7 古津八幡山	I	64	13	7	22	180	25	4	70	34							1	6	1	1	1	2		2		8			時代不明除く 磨製石鏃1	
8 高福場		5																						1						
9 藤ヶ森		8																												
10 六地山		50	7		6														2						1				報告分	
11 大沢		6						1		1															1					
12 山谷下層		11	1	3	1	16	3			3														1		1				
13 松ノ脇		2	2	1		11		1											2		1									
14 小丸山		11	—	3	1			2		2	1																			
15 西谷				6	1			3	8	1		2	8	11						18										
16 下谷地		215	53	1	155	20		14	27	12	65	8	5	10	6															
17 箕輪		114	15	89	93	25	2	58	20					11														19		
18 裏山		2	3	1	1	3	1	2	3	71	165								4	12	1	4		1						
19 吹上		109	1		7		20	7	43	19				1	1			15			4						23 磨製石鏃14			
20 下馬場		1	2	1	2	7	1	5	1	150	88	5		4	2			7	4991	1				3						
21 平田		47	16	58	72		14	90	80	699	8	6						6	2	1937	2	3	5			830 磨製石鏃1				

第23表 機能別出土点数と比率

No	遺跡名	地域	集落区分	時期	集落区分	狩猟具・武器	漁撈具	除草・収穫具	土壌具	調理具(磨石類)	伐採・加工具	合計		
1 山元	阿賀北	I A	中期後葉～2期	I A		29(12.3%)	1(0.4%)			15(6.4%)		190(80.8%)	235	
2 滝ノ前	阿賀北	II	2～3期	II		14(25.9%)						40(74.1%)	54	
3 砂山	阿賀北	III	中期後葉～2期	砂丘上		61(37.2%)	1(0.6%)			2(1.2%)		100(61.0%)	164	
4 長松	阿賀北	III	中期後葉～1期	砂丘上		33(52.3%)				3(4.8%)		27(42.9%)	63	
5 中曾根	阿賀北	III	中期後葉～1期	沖積微高地		7(53.8%)					1(7.7%)	5(38.4%)	13	
6 道端V	阿賀北	III	中期後葉	沖積微高地		30(50.8%)		3(5.1%)		9(15.3%)	1(1.7%)	16(27.1%)	59	
7 古津八幡山	信濃川右岸	I A	1～4期	高地		78(19.4%)		1(0.2%)		70(17.4%)	4(1.0%)	250(62.0%)	403	
8 高福場	信濃川右岸	I A	中期後葉～2期	高地		5(100.0%)							5	
9 藤ヶ森	信濃川右岸	II	中期後葉～4期	高地		8(100.0%)							8	
11 大沢	信濃川左岸	II	1～2期	高地		6(75.0%)					1(12.5%)	1(12.5%)	6	
12 山谷下層	信濃川左岸	II	1～2期	高地		12(34.2%)				3(8.6%)		20(57.1%)	35	
13 松ノ脇	信濃川左岸	III	中期後葉～1期	高地		4(21.1%)				1(5.3%)		14(73.7%)	19	
14 小丸山	柏崎平野	III	中期中～後葉	高地		11(55.0%)					2(10.0%)	2(10.0%)	5(25.0%)	20
15 西谷	柏崎平野	I B	2～5期	高地							16(40.0%)	3(7.5%)	21(52.5%)	40
16 下谷地	柏崎平野	III	中期中～後葉	高地		215(36.3%)					35(5.9%)	14(2.4%)	327(55.3%)	591
17 箕輪I	柏崎平野	III	中期中～後葉	高地		114(28.3%)					58(14.4%)	2(0.5%)	228(56.7%)	402
18 萩山	頸城	I A	2期	高地		6(2.4%)					3(1.2%)	2(0.8%)	240(95.6%)	251
19 吹上	頸城	III	中期中～後葉	平地		109(48.9%)	1(0.4%)	15(6.7%)			7(3.1%)	20(9.0%)	71(31.8%)	223
20 下馬場	頸城	II	2～3期	高地		4(1.5%)	2(0.7%)			1(0.4%)	150(56.0%)	5(1.9%)	106(39.5%)	268
21 平田	佐渡	III	中期中～後葉	平地		47(4.3%)		6(0.6%)			90(8.3%)	14(1.3%)	933(85.6%)	1090

歴史博物館1997・禰宜田2002の区分によれば「加工工具」となるが、不定形石器にスクレイパーなどの完成品に加え、製作途中の失敗品等を含む可能性がある。また、本稿では磨石・敲石・凹石を一括して磨石類としている。これは「磨面」「敲打痕」「凹痕」のうち複数の使用痕が一つの個体に含まれているためである。「調理具」に区分されているが、異なる種類の凹痕があることから、同一の機能か否かは問題が残る。以上、大きな制約があるものの、試みとして区別の石器組成を見てみたい。本遺跡は、狩猟具・武器12.3%、調理具6.4%、加工工具が80.8%となり、圧倒的に加工工具が多い。比率は若干異なるものの、加工工具が卓越する点は古津八幡山遺跡とほぼ同じである（狩猟具・武器19.4%、調理具17.4%、加工工具62.0%）。このような傾向は、禰宜田氏のⅡ 3類（武装強化しなかった集落で、収穫具欠落・調理具卓越）となり、石器組成から戦乱や緊張状態を想定できない。

狩猟具・武器が卓越するのは、沖積微高地の道端V遺跡・中曾根遺跡や砂丘上の長松遺跡で、50%以上の比率を有する。また、砂丘上の砂山遺跡も37.2%と高い比率を誇り、高地性環濠集落の本遺跡や古津八幡山遺跡より狩猟具・武器とされたものの比率が高い傾向にある。この要因としては、遺跡の主要時期が中期であること（道端遺跡・長松遺跡）や、不定形石器・磨石類の少なさに起因するためと思われ、緊張状態を反映した結果、低地の遺跡で狩猟具・武器が多いとは考えがたい。

## B ガラス小玉について

本遺跡では墓域と考えるA地点1TのSK1からガラス小玉72点（完形品68点、半損品4点）が出土した。SK1は完掘していないことから、これ以外に副葬品が存在する可能性があると共に、ガラス小玉の数量も更に多くなる可能性がある。検出したガラス小玉は1つの墓の副葬品としては特筆すべき数量であるため、弥生時代における県内の出土例を中心として出土分布状況を概観する。

県内でガラス小玉の出土したのは10遺跡である。このほかに上越市（旧柿崎町）木崎山遺跡〔高橋ほか1992〕で丸玉が検出されているが、古墳時代の可能性が高い。現状において当該期のガラス製品は小玉が圧倒的に多い。ガラス小玉は上越市裏山遺跡〔小池ほか2000〕の6点を筆頭に、長岡市原山遺跡〔小林1992〕で複数点、新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡〔渡邊・立木ほか2001・2004〕で2点、それ以外は上越市吹上遺跡〔笛沢ほか2006〕・長岡市横山遺跡〔広井・小林1992〕・新潟市（旧巻町）大沢遺跡〔甘粕ほか1982〕・村上市堂の前遺跡〔埋文事業団ほか2008〕で各1点が報告されているにすぎない。遺構内出土は裏山遺跡1号竪穴建物（2点）・4号竪穴建物（3点）、大沢遺跡4号竪穴（1点）に限られ、その他は包含層・表土からの出土である。山元遺跡例と同じように、弥生時代の墓からの出土例は現状ではない。特異な例として長岡市（旧寺泊町）諏訪田遺跡で管玉に似た棒状品が確認されているが、孔がない〔寺村1991〕。帰属時期は明確でないが、弥生時代中期の可能性がある<sup>1)</sup>。

ガラス小玉の帰属時期については、遺構出土資料が少ないとから明確にし難いが、各遺跡の盛行年代から推定すると、吹上遺跡が弥生時代中期に遡る可能性が残るが、それ以外は弥生時代後期の可能性が高いと考える。県内では後期に入り、出土例が増加する可能性が高い。後期に入り、ガラス玉の分布が拡大する点や、量的に増加することが指摘されており〔富樫2003ほか〕、県内例はこの状況と合致する。ガラス小玉出土遺跡は、大沢遺跡・堂の前遺跡を除いて環濠集落であり、このうち裏山遺跡や古津八幡山遺跡

<sup>1)</sup> 諏訪田遺跡ではこのほかに「淡いコバルト色で一部が風化しているガラス製の小玉（厚さ6.8mm、径8.2×8.0mm、孔径上部1.8mm、下部1.6mm、重さ0.7g）が採集されている」という〔寺村1991〕